

## 欠史八代と言われている天皇は架空の天皇？

### 神武天皇と崇神天皇は同一人物？それって本当？

久保田 真光

神武天皇～初期天皇（神武～開化天皇）は皇室の起源を、古く見せるために、後世に創られた、取るに足らない絵空事という学説がある。その学説は本当なのか？仮に、そうであれば、より自然な物語として系譜、宮、陵の所在地、妃の出身地など、より権威を高めたり、又は、後世の模範とするはずではないか？すべて後世の創作としては、あまりにも不自然である。何らかの歴史的事実が盛り込まれていると思われる。

そこで、上記の欠史八代の天皇が実在したら、西暦年になると、それぞれの天皇は何年ぐらいの治世・在位だったのか？

「紀」「記」は神武天皇（カヤマトリヒコ）の多くの事績や伝説を記して、二代綏靖天皇（オカミ）～九代開化天皇（ウヤマトコオホヒ）までは系統・宮・陵のみで簡易に記されている。その後、第10代、崇神天皇（ミヤコヒコニ）からの天皇は多くの事績や伝承が記載されている。二代綏靖天皇（オカミ）～九代開化天皇（ウヤマトコオホヒ）までは欠史八代と呼ばれ、その記述は系譜、宮、陵の所在地、後の名、及びその出身、その王子、皇女などで、他の事績や伝承はほとんど記されていない。そのため、実在していないのでは、と言われている。その実在しない、とされる理由には彼らの寿命、在位年数が異常に長く、人間離れしていて、とても信じられない。例えば神武天皇～仁徳天皇まで16代の天皇で100歳以上が12人、内120歳以上が7人、140歳の垂仁天皇もいる。倭国の人は1年を春と秋で2年数えるという説もあるが、それにしても長すぎる。

また、この16代の天皇は、仲哀天皇を除く、すべて天皇が親から子への、直系で天皇の位が継承されていること。

さらに和風賜号が「オヤマト、タリヒコ」など後の天皇のそれと似ているといわれる。しかし、これは後世の天皇が先祖の名前を真似したともいえる。

そもそも、初期の天皇の寿命が永くなったのは、神武天皇（カヤマトリヒコ）の即位年が紀元前660年、（辛酉）とされたからと言われている。これは古代中国の讖緯説によるもので、特に21回目の辛酉は大革命が起こるとされるので、推古天皇9年（西暦601年）の辛酉から60年×21回=1,260年前に遡って神武天皇（カヤマトリヒコ）の即位の年にあてられたものという説がある。これは朝鮮半島の高句麗、百濟、新羅などの国々より日本の歴史を古くさせることによって、天皇家＝日本国の権威も対外的に高めようとして、日本書紀の編

者が恣意的に作成したものといえる。こういった非科学的（当時は最先端の科学だった？）な紀年は当然、事実ではない。

しかしながら、その編年はともかく、崇神天皇（ミマキリヒコイニエ）以前の天皇の实在説を否定する方々も多いのだが、欠史八代の天皇の实在説を唱える意見も根強い。例えば、その八代の記載によると葛城地方に宮や陵が多くあり、磯城地方にはない。しかし、後も地方の有力者（磯城地方の県主など）娘に偏っている。さらに、后になる女子についても、その親（出身）は具体的に記されている。さらに三代～六代までの天皇は同一人物（磯城の県主）の娘を妃としており、この頃の世代は親子ではなくて同世代の兄弟、親族などで皇位を継承していると思われる。

皇太子以外の王子、命、皇女の名も、多く記され、第二子が帝位に着くことも多いようだ。いずれにしても、すべて創作にしてはバランスも悪く、内容も偏り、不自然に具体的すぎるのだ。

前述したように、その寿命（編年）と親から子への継承を除けば、特に不自然なところは無く、後の天皇家の系譜と比較しても、特に遜色はない。つまり、この欠史八代といわれている系譜には、その背景に何らかの歴史的事実が含まれている可能性はあると思われる。

日本書紀の編年（干支）は第17代履中天皇より寿命、在位年数が、その後の天皇家の在位年数と比較して、大きな相違点は無く、要するに通常となっており、その編年も宋書の記載に近づいており、（別表を参照）それ以前は、すべて親から子へ帝位が継がれていたが、この履中天皇より兄⇒弟へと兄弟間で頻繁に皇位継承が行なわれている。当時としては、これが自然であり、親から子へという継承が17代も続くことは不自然と思われる。よって履中天皇の頃より、ようやく、その編年や兄弟間の帝位継承も現実性を帯びてきて、史実に近くなってきたようだ。おそらく、日本書紀の資源となった帝紀などは、このころには、干支による記録が少しずつ、なされて、それより以前の編年は、その記録が無かったのではないだろうか。あるいは、その記録、又は当時の伝承というものはあったとしても、何らかの理由で、例えば、当時の天皇家には都合の悪い？事実が記載されていて、抹殺されたことも考えられる。

そこで日本書紀の編者は、前述の初代天皇である神武天皇（カムヤマトイリヒコ）の編年の定めるにあたって、古代中国の讖緯説を取り入れて、朝鮮半島で伝えられている高句麗、百濟、新羅などの国々の建国より、日本国の建国をより古くするために、初代天皇から、その即位の編年が記載してある、履中天皇の前の仁徳天皇までの17代までの天皇の寿命とその帝位の在位年数を増やしたのだろう。

## 神武天皇と崇神天皇が同一人物ではないか？という説がある。本当？

その理由は二人ともハツケシラスマミト？と読まれているから。神武天皇は「初天下」ハツケシラスマミト、崇神天皇は「啓示」どうしてこれがハツケシラスマミトと読むのか？先人の注釈（古事記）によるものらしいがハツというのはどこから来たのか。神武天皇は九州より、軍事活動として東征したから。崇神天皇は各地に四道将軍を派遣して諸国を勢力内に入れたから。何となく類似しているから。ということであろうか。

この二人の天皇は生まれた場所や活躍した場所も、その時代背景や軍事的な内容も、まったく異質のものであることは明らかである。無論、その妃や皇子達もすべて違う。

それを何故？同一人物、又はモデル？として安易に言えるのか。無理して同一人物又はモデルとすることは無意味であり、不要なことである。神武天皇は当時の九州から西日本を統一したものであり、崇神天皇はその中興の祖として、さらに東日本も含めて統治し、初めて税金を取って国家の本質を国民に知らせた天皇として、日本書紀の編者も、そのことを意識して、敢えて、文字を違う文字にしたのではないだろうか。

## 結論として

初代の神武天皇（カムヤマトイリヒコ）から崇神天皇（ミマキイリヒコイニエ）までの10代の天皇は、その寿命（編年）と親から子への、直系の皇位継承の二点を除けば、後世の天皇家の系譜と比較しても、特に遜色は無く、この初代天皇から10代の天皇は、それぞれ、実在したものと思われる。

初代天皇の神武天皇から欠史八代の天皇やその後の天皇も、すべて実在したとしたら、彼らはおよそ西暦でいうと何年頃に実在したのか。

ここで歴代天皇の平均在位年数を西暦年に当てはめて、一つの方程式を考えてみた。

$$y = (x - b) / a$$

Xは西暦年とする。

yは歴代天皇の第〇〇代とする。

aは歴代天皇の平均在位年数とする。

bは初代天皇である神武天皇の在位している西暦年とする。

まず、aの算出方法について。

第21代雄略天皇が在位しているという、全く、別個の独立した種類の記録によると、

- ① 日本書紀                   西暦 456 年～479 年
- ② 中国の宋書               西暦        ～478 年
- ③ 稻荷山鉄剣               西暦        ～471 年～

① ② ③は雄略天皇の在位している西暦年が、おおよそ、一致している。よって雄略天皇はこの西暦 471 年には天皇として在位していたことは事実といえる。さらに、その後の歴代天皇の実在はもちろん、その編年についても日本書紀の記述は正しいものと判断して良いだろう。

その後の歴代天皇の在位している年数の平均値をとるために、今上天皇の在位までを見ても良いのだが、明治天皇以降、特に昭和天皇は西洋医術や西洋の薬など、また生活の変化により、少なくとも古代の天皇より長く在位しているようなので、古代の天皇家の在位年数をより、正確さをきたす為に江戸時代の最後の天皇である第 121 代の孝明天皇までの西暦による在位年（後半）を算出の基礎とした。

$$a = \frac{【1,865 \text{ 年（孝明天皇在位していた西暦年）} - 478 \text{ 年（雄略天皇在位していた西暦年）】}{【第 121 代（孝明天皇） - 第 21 代（雄略天皇）】}$$

=13.9 年/代となります。(平均値)

b の算出方法については、上記の方程式に  $a=13.9$  を入れて変形しますと、

$$b = x - 13.9y \text{ となります。}$$

そこで、雄略天皇以後の歴代天皇の在位の西暦年  $x$  と第〇〇代は日本書紀等にて判っているので、雄略天皇より後の歴代天皇を 100 年ごとにサンプリングして、 $b$  の平均値を取ることになれば  $b$  の平均値が求められる。

上記の二種類のデーターを基にグラフを作成して、二つの項目を縦軸、横軸にとり、その交差する位置に点を配置して散布図を作成する。歴代の天皇家の在位の年と第〇〇代との相関関係を調べて近似直線を求めて、数値的に不明な初期の天皇家の在位年を予測値として求めることができます。長い年月の散布図としては、その値が、かなり集中しているといえる。予測値も、その精密度は高いだろう。

別紙グラフ①算出

別紙グラフ②参照

ここで、この  $b$  の西暦年を付きとめるため、雄略天皇以後、歴代の天皇の在位年数をサンプリングし、方程式やグラフにて算出した。

すなわち別紙グラフ①近似直線を初代天皇が在位した頃にその直線を延長して、さらにグラフ②でサンプリングして平均値を取ると。

**初代神武天皇の在位（カマヤマトイワヒコ）は西暦、約 100 年頃と推定できる。**

ここで、後漢書の東夷伝に記載されている西暦 107 年に倭国王師升が後漢へ生口 160 人を朝献したという記述に注目してみる。

この記述以前は、倭人や奴国王が朝献したことはあるが、中国の文献に初めて、**倭国王師升**という人物が登場したことになる。その倭国王、自らか、又は使者によるものかは不明だが、当時の倭国の一部の国ではなくて、倭国全体の王として、後漢王朝に認識された

ということは、実に重要な意味を持っている。

その当時の未熟な航海技術で、中国へ渡海するだけでも相当困難であるのに、その大勢の人数を乗せる船を手配し、小さな船舶で随行する人数も含めれば200～300人？さらに航海中の食料、水、荷物も含めれば、それ相当の数の大型船が(例えば40～60隻以上?)必要だったと思われる。

当時、倭国には、それだけの船舶を準備できる大きな勢力のある倭国王が、すでに出現していたと、推察できる。

ゆえに、当時の後漢が、倭国の中の奴国や伊都国のような一国ではない、倭国の全体を代表する倭国王として認められた人物が、すでに存在したのではないだろうか。

このことは後漢書の記録で記載されているので、その信憑性は高い。また一方で、ここで「紀」・「記」に記載されている初代天皇である神武天皇(カムヤマトイリヒコ)が水軍を押し立てて、東征して、大和の橿原で即位して、九州を含めて、主に西日本全体(天下)を初めて治めたという記述と、その当てにならない編年を除けば、後漢の記録と「紀」・「記」の伝承がおよそ一致している。

つまり、西暦107年に後漢へ献上した倭国王は初代天皇である神武天皇(カムヤマトイリヒコ)であると推察できる。

ゆえに、上記の方程式のb(初代天皇の在位した西暦年)は西暦107年とすることができる。

このことは魏志倭人伝には、次の記載からも推察できる。

「其の国、もと、亦男子を以って王となし、住まること、七、八十年、倭国乱れ、相攻伐すること暦年、すなわち、共に一女子を立てて王となし、名付けて卑弥呼という」とある。

後漢書東夷伝にも

「桓・靈の間、倭国大いに乱れ、更々相攻伐し、暦年主なし、一女子あり、名は卑弥呼という」とある。

梁書東夷伝にも

「漢靈帝の光中倭国乱れ・・・」とある

魏志倭人伝	王が住まること	七・八十年とある。	
後漢書東夷伝		西暦 147 年	～ 西暦 188 年
梁書東夷伝		西暦 178 年	～ 西暦 184 年

上記の表から、倭国の乱は少なくとも西暦 170 年～西暦 188 年頃まで続いたようである。魏志倭人伝の王が住まること、つまり、その倭国の乱以前には、西暦 100 年前後には、すでに倭国全体を統治する王（男子）が存在していたことを、魏志倭人伝は語っていることになる。

魏志倭人伝の編者の陳寿は、別の後漢書の倭国王師升が西暦 107 年に朝献したという記録を見て、王が住まること七八十年と記載したかもしれないが、西暦 107 年頃には倭国を代表する男王が存在し、且つ、継続していることを魏国では、認識しており、そのことを記載したのではと思われる。

また、卑弥呼は共立されてから、50～60 年は女王として、存在していたことになる。「共立」の解釈は魏志倭人伝の東夷伝以外にもあり、扶余の条や高句麗の「共立」という文字が表れており、いずれも、その王家宗族の直系ではない、庶子や少子が王として擁立された場合に用いられており、卑弥呼の場合も王家宗族の直系ではなかったのが、それに近い宗族の一人であり、いわば、その血筋は前代の王の娘ではないだろうか。

そうでなければ、如何に卑弥呼が、その優れた呪術的な能力は高くても、ましてや、平民の出身や倭国全体を統治する家系ではなく、他家の豪族の出身では、西暦 107 年頃から続いている倭国を代表する王家の宗族の王子（男子）や、他の有力な豪族達は卑弥呼を倭国全体の女王とすることは納得もしないし、地方出身の豪族の出身である彼女を女王として、担ぎあげるわけにはいかないだろう。

この魏志倭人伝などの倭国乱の記載からも、卑弥呼の前々代（七・八十年間）には倭国を統治した王がいたことになり、「紀」・「記」に記載されている初代神武天皇（カムヤマトイリヒコ）が、今般、歴代の天皇家の平均在位年数を算出した結果から、西暦 107 年頃に倭国全体を統治した倭国王師升の後漢へ朝献したという、文献と一致しているのである。もっとも、この時代はまだ、この大和朝廷の前身？は統治というよりは、倭国の連合体の盟主かもしれない。

埼玉古墳の稲荷山鉄剣銘の意富比埜と「紀」・「記」に記述されている大彦命との西暦年を比較してみる。

ここで、埼玉県にある埼玉古墳の稲荷山鉄剣銘に名前が記載されている意富比埜、以下、八代の系譜を見てみよう。

二つの異なる方法を用いて、稲荷山鉄剣銘の意富比埜の世代（西暦年）と日本書紀の記述にある大彦命の世代（西暦年）を算出して、この二人の人物が同一人物であるという通説が、正しいか否かを、それぞれ、算出して比較してみる。

まず、この稲荷山鉄剣銘の意富比埜は日本書紀で孝元天皇（オヤマトネヒコケニル）の第一王子の大彦命のことではないかといわれている。大彦命は「紀」・「記」によると、第九代開化天皇（オヤマトネヒコオヒ）の兄となっている。

いわゆる欠史八代の中に含まれている人物だが、次の第10代崇神天皇（ミヤコノヒコニエ）の正妃の父であり、また、その第10代崇神天皇の治世に起きたタヤハシホの反乱で活躍し、さらにその後、四道将軍として北陸や越を平定し、また、四道将軍の一人で東海道を平定した自分の息子であるタケカワケと相津で再会したところが福島県の会津という地名になったという記述がある。

最初に、一つの方法として、前述の方程式  $y = (x - b) / a$  を用いて大彦命の活躍した西暦年を算出してみる。大彦命は開化天皇と同世代の人物なので、その時の西暦年を  $x$  とし、第〇〇代を第9代として

$$9代 = (x年 - 107年) / 13.9年/代$$

$$x年 = 13.9年/代 \times 9代 + 107年$$

$$= \text{西暦} 232 \text{年} \text{となる。}$$

次に、別な方法として、稲荷山鉄剣銘の系譜から算出してみる。その歴代の系譜はすべて、親から子へと、その系譜が連続して明記してある。その内容をみると、非常に信憑性が高いといえる。その理由として

- ① カケル大王（雄略天皇）が斯鬼宮と在るといふ。崇神天皇や景行天皇の宮と同じの磯城であること、この場所は、やはり三輪山の近くの長谷にカケル大王（雄略天皇）の宮があったとされる「紀」・「記」の記述がある。ここは、現代の奈良県桜井市の範囲であること。
- ② 5代目の多沙鬼獲居まで、当時の大王家の王子たちにも、付けられている獲居や足尼という尊称がつけられていること。
- ③ 6代目の半弓比から、その尊称がはずされている。これは天皇家が6代目からは臣



籍に降下するという、古代から現在まで襲踏されている天皇家の制度に沿っていること。  
などがあげられる。

ここで、全く別な方面から、親（父）から子へと連続している系譜を他の例でみると、同じように武家の流れで、**桓武天皇よりの系譜で伊勢平氏と、清和天皇より源氏の系譜が有る。**

(ア) **桓武天皇から平清盛まで**親（父）から子で数えると12代目となる。

$$\begin{aligned} & (\text{西暦 } 1177 \text{ 年 (平清盛)} - \text{西暦 } 804 \text{ 年 (桓武天皇)}) / 12 \text{ 代} \\ & = 31.1 \text{ 年/代 (活躍した代の平均年数)} \end{aligned}$$

(イ) **清和天皇から源頼朝まで**親（父）から子で数えると11代目となる。

$$\begin{aligned} & (\text{西暦 } 1197 \text{ 年 (源頼朝)} - \text{西暦 } 874 \text{ 年 (清和天皇)}) / 11 \text{ 代} \\ & = 29.4 \text{ 年/代 (活躍した代の平均年数)} \end{aligned}$$

(ア) と (イ) の平均値をとって、両家の親（父）から子の活躍した平均年数は  
**= 30.1 年/代**となる。

これは当時の出生した子供の死亡率や武家としての家系から考えると妥当だろう。稲荷山鉄剣銘の乎獲居臣も武家の家系である。

この30.1年/代を稲荷山鉄剣銘に記載されている八代の系譜に当てはめて算出すると。

$$30.1 \text{ 年/代} \times 8 \text{ 代} = 242 \text{ 年}$$

**意富比埜が活躍した時期は**

$$\text{西暦 } 478 \text{ 年 (乎獲居臣の活躍した年)} - 242 \text{ 年 (上記より算出したもの)} = \text{西暦 } 229 \text{ 年}$$

よって、意富比埜が活躍した西暦年数は上記により 229 年頃であり、前述した「紀」・「記」の伝承から 方程式 から求めた、大彦命が活躍した時期 **西暦 232 年** と一致している。

結論として、欠史八代といわれている伝承の中で大彦命は **西暦 230 年頃** に実在していたものと推察できる。

「紀」・「記」の伝承や魏志倭人伝の文献資料、考古学の実績などを参考に、この方程式で西暦を推測し、下記のことを大胆に推定してみた。

特に日本書紀の崇神天皇マキリヒコニエ以前の記事については、まったくの絵空事にしてはあまりの、その一貫性は無く、物語として、少なくとも天皇家を崇高なものとしては上手でない場面も多く記載されている。例えば、天孫降臨も何故？九州の日向なのか？朝鮮半島の神話のように天から、そのまま大和の三輪山に降臨すれば、より神聖な話になるし、何より、諸説が多く、一書では、という話が多すぎる。一書ではという話は作り話には、まったく不要である。すべて、後世に作文したものとしては、これほど、下手な話は有り得ないだろう。

天皇家に現在も伝えられている三種の神器である、鏡、剣、勾玉の宝器は天皇家のルーツが、明らかに、北部九州の伊都国の平原古墳(女王が埋葬されている?)や、当時、最先端で発展していた奴国の王族の墳墓に埋葬されている王(奴国連合の盟主)を祖先に持つことは容易に推察できる。

北部九州を代表する王家(奴国連合)が出雲地方や近畿地方に、自らの王族将軍を派遣し、勢力を拡張していくなかで、特に大和地方では、本家本元(奴国連合の盟主)を超越する王族将軍である神武天皇(カヤマトリヒコ)現れ、その地域豪族(吉備地方、瀬戸内、難波など)の参集を得て、新興勢力が生まれたこと。また本家本元(奴国連合の盟主)が何らかの理由で衰退していったことも推察できる。

出雲国の国譲りも、神武東征も、後世の絵空事ならば、そもそも、まったく記載する必要は無い、苦戦した軍事行動なのである。

つまり「紀」・「記」に記載されていることには、当時7～8世紀の人々にも、出雲の国譲り、神武東征などの大きな戦いは、数百年前の古来より、その土地の人民達に語り継がれた、消すに消せない、歴史的事実が部分的でも存在していたのだろう。

## 高天原の位置は？

基本的には神話なので、どこでもいいのだが、西暦 50 年頃の九州北部の奴国や伊都国の王宮で奴国連合を組織し、西日本制覇をもくろむ。しかし、その後、西暦 70~90 年頃、内部による王位相続争いが勃発し、その王位継承が正常に行なわれず、漢倭奴国王印の金印が、その王位継承に敗れたある宮廷の者によって隠匿され、その者も不慮の死によって、所在不明となったものが、後の世（江戸時代）に偶然発見された。

奴国連合の内部抗争は、更に続き、本来は倭国全体を統治すると思われる先進国であったが、その宗家の勢力は著しく衰退し、結果的に、自らの宗家の支流である、神武天皇（カムヤマトイリヒコ）が大和地域で西日本全体を制覇した。

## 天照大神は？

西暦 50~70 年頃、伊都国の平原墳墓の葬られた実在の巫女王で、当時、奴国連合はその巫女王と奴国王（男）との二人王体制で治めており、国家の重要な案件は王（男）だけでなく、必ず巫女王の占い（神の神託）による承認が必要だった。つまり王（男）だけでは専制政治が出来なかった。この制度は中国大陸の東北部の起こった扶余族（ツングース族）や朝鮮半島の初期の高句麗から伝わったものと思われる。この制度は、後の邪馬台国の女王制度に引き継がれている。

## スサノオの尊は？

明らかに捏造された罪により、奴国連合の王位継承戦から敗退した王族の一人。出雲国へ派遣された王族将軍か、又はそのように創作されたものか。

## 出雲国は(国譲り)？

西暦 70~90 年頃、材知ヌ（スサノオの尊の子？又は朝鮮半島に、その協力者がいた？）が九州北部を経由しないで朝鮮半島などと貿易し、富を蓄え、たたら製鉄を起し、通商国家、あるいは武力国家として北陸や日本海沿岸などを勢力下にし、吉備や近畿など西日本のエリアにも大きな影響をもたらしつつあった。

しかし、奴国連合に攻め滅ぼされた。その時に凄惨な出雲王族の滅亡があってようで、その時に大量の銅剣（古代の通商貨幣？×印は出雲ブランドの品質保証？）や銅鐸（銅剣の原料として各地から集められたもの）が隠匿された。

後に、その祟りとして大和朝廷の天皇家に恐れられて、神話に国譲りとして、飾られて語られている。消すことのできない民衆の伝説が、「紀」・「記」編纂時にも残っていたのであろう。現在でも皇室は材知ヌ？（韓神社？）を皇居内に祭られているようだ。

## 天孫降臨の地は？

西暦50年頃、奴国又は伊都国（現在の福岡市の海辺周辺）。韓国に向いている良き処で笠沙岬は鹿児島県ではなくて、現在の福岡市の海辺周辺というのが自然であろう。

便宜上、九州島で一番、天に近い高い山として、高千穂峰？霊峰に降り立った。これは朝鮮半島の神話を意識しているようだ。

## 魏志倭人伝に記載されている21ヶ国の内？

奴国の名前に類似しているものが多く、奴国の衛星国家(奴国の王族将軍が建国した国々)の名残か？拘奴国もその一部と思われるか？

本来ならば奴国連合の王族の宗家が西日本（倭国）全体を統治すべくものだったが、王位継承争いで疲れ果てて、宗家でない王族の一部で福岡県の朝倉市周辺の地盤にしていた（師升＝神武天皇）が奴国宗家の指示で瀬戸内海から大阪、奈良盆地へ侵攻し、その武力を充実させ、内部抗争で弱っている北部九州（奴国宗家）も含めて、西日本（倭国）を統一を果たした。

## 倭国王師升はどこ誰か？

日本古代史の存在した最初の倭国全体の王は、どこ誰なのか？このことは非常に重要な事案である。師升と言う人物が倭国王の使者であっても、西暦107年には倭国全体（九州・西日本・東日本の一部も含む？）を統治した王がいたことを後漢は認めていることになる。

師升は奴国連合の王族将軍として、最初は福岡県の朝倉地区(現在の奈良盆地と周辺の地名が類似している)などを治めたが、その後奴国王家(本家)の指示で、日向、瀬戸内海、大阪湾へ侵攻し、大きな戦果をあげた。

その実力は奴国王家(本家)をしのぐほどに成長した。その頃、本家では激しい王位継承争いが起こっており、又は本家筋に攻め込まれた？そのようなことも起こり、九州北部一帯は戦乱の場と化した。嫌気をさした、その一族郎党が新天地である、やまと盆地へ集団で移動したものか。又は天災飢饉によることも考えられる。その大和盆地で勢力を蓄え、近隣諸国とも、ときには争い、又は融合して、奴国連合（本家）を上回る勢力を構築していった。特に瀬戸内の国々の海運力を自分の勢力内に治め、その海運力を使って、各地を制覇し、その実力を持って本家である北部九州の争いも收拾させた。

西暦107年頃、漢へ生口160人という大人数を朝献するほどの実力を持っていた。漢書に初めて倭国王として記載されていることは、西暦107年に広範囲(西日本+東海)の

倭国王が存在したことを意味するものか。つまり「紀」・「記」の神武天皇の相当する人物と思われる。

## 倭国の大乱は？ また何故？ 卑弥呼が共立されたか？

倭国王師升（初代神武天皇カヤマトイリヒコ）の後、第5代（考昭天皇ミマツヒコカエシネ）～第8代（考元天皇オヤマトネヒコケニル）の頃に、東海地方（尾張氏）、吉備地方の有力な豪族達、大和地方の穂積氏などが、王家の後宮に妃を入れて、外戚となり、それらが激しい王位継承の争いに発展し、特に、王族の庶子を担いで東海地方の豪族と吉備地方の豪族が互いに勢力争いをし、その配下である、九州や関東も含めた大乱と発展した。

その後、王家の子女で、強い霊力を持っているという卑弥呼を共立して、個々の男子の王族とその外戚に勢力が集中しないようにした。

さら外戚の勢力増大を避けるため、第8代考霊天皇～第10代崇神天皇ミマキイリヒコイニエの頃には、王家の姫を妃として立てるようになった。このことは、後世の藤原氏の姫を皇后にするまで継続した。

また、当時、尾張地域の大洪水や、他の地域でも、大飢饉が発生し、各地の有力者たちも、大規模な出兵を中止せざるを得なかった。そんなときに、卑弥呼が広範囲の地域で、組織的な救援措置を公平で政治的（穀物を融通し合う）に行なったことも、各地の有力者の支持を得た。そのようにして倭国の大乱は卑弥呼のカリスマ性も含めて、終息することになった。

## 邪馬台国はどこ？

奈良県の纏向遺跡。ここでは西暦150年頃には吉備地方、出雲、東瀬戸内などの大きな墳墓を融合させた大きな纏向型前方後円墳という、今まで日本列島にはない、大きな墳墓として（王族の埋葬施設？）100m前後の6～7基の王墓が続けて築造されてきた。

この6～7基の纏向型前方後円墳こそが、卑弥呼の父親、伯父、祖父などである、第5代（考昭天皇ミマツヒコカエシネ）～第8代（考元天皇オヤマトネヒコケニル）の頃の大王クラスの墳墓と思われる。

そこでは神聖な儀式を行い、王の尊厳と、その神性の継承を内外にハッキリ示して、上記のような、王位の継承争いを未然に防ぐ、**言わば政治的道具(建造物)**として、発達し、いわば神聖な政治宗教都市として、大和の南西にある纏向地域に、計画的に建設された政治宗教（倭国の王墓の地）の都市国家。

## 邪馬台国女王卑弥呼は誰？

第7代考靈天皇<sup>イハヒコノミコ</sup>の皇女である倭<sup>ヤマト</sup>トヒモリヒメ。

## 卑弥呼の弟は誰？

吉備津日子（実の弟）又は崇神天皇<sup>ミヤコノミコ</sup>（甥）。

## 卑弥呼に仕えた奴婢千人は誰々？

奴婢千人は大袈裟と思われるが、卑弥呼の宮殿で鬼道を修業した各地（九州、西日本、東日本、北陸、越）などの有力者や豪族の未婚の子女で、各地の王位継承に必要な、前方後円墳の神聖な儀式を、地元の各地域に巫女として伝えた。中には天皇家に嫁ぐ者もいたが、邪馬台国の政権にとっては、体のいい人質？とも受け取れる。

## 卑弥呼の死後の男王は？

第10代崇神天皇<sup>ミヤコノミコ</sup>。

## 三輪山の神の祟り？

天候不順などで大飢饉が発生し、倭<sup>ヤマト</sup>トヒモリヒメと崇神天皇<sup>ミヤコノミコ</sup>が神託によって鎮静化した。

## 卑弥呼の死後の反乱は？

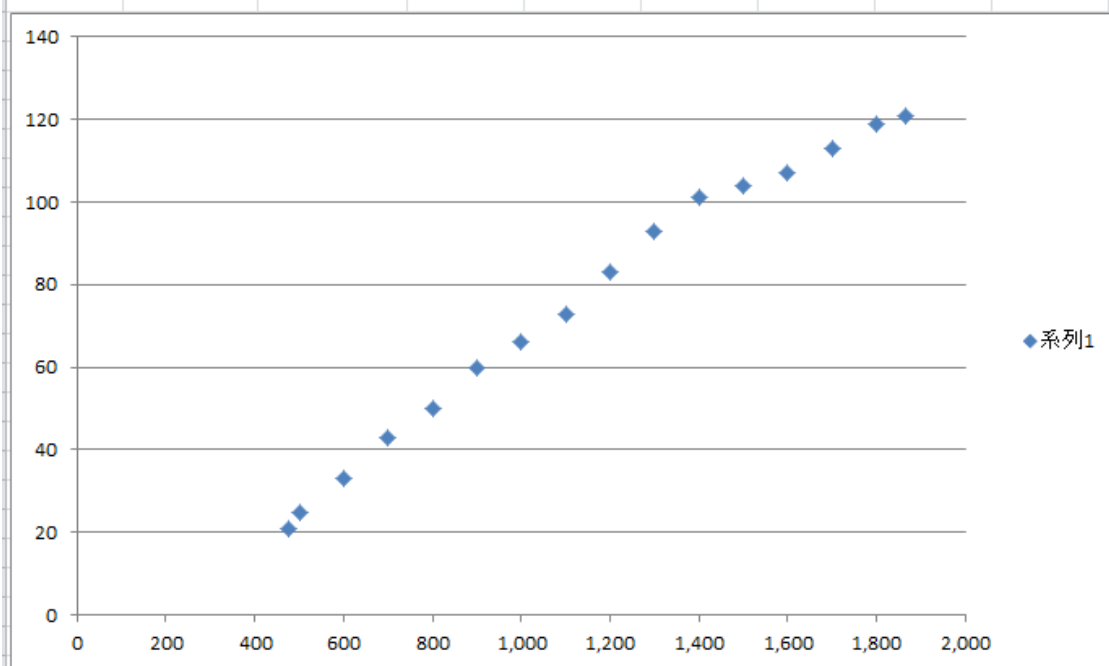
建波爾安王<sup>タケノニヤスヒコ</sup>の反乱。

## 台与は誰？

第11代垂仁天皇<sup>タケノニヤスヒコ</sup>の皇女である倭姫の命。後に、崇神天皇<sup>ミヤコノミコ</sup>と仲たがいとなり、伊勢へ移転。そして、巫女王と男王の二人体制の統治方法は、巫女王の承認制度が衰退し、伊勢神宮へ祭られるのみとなり、神の神託を重視する政治宗教の終焉を迎えた。

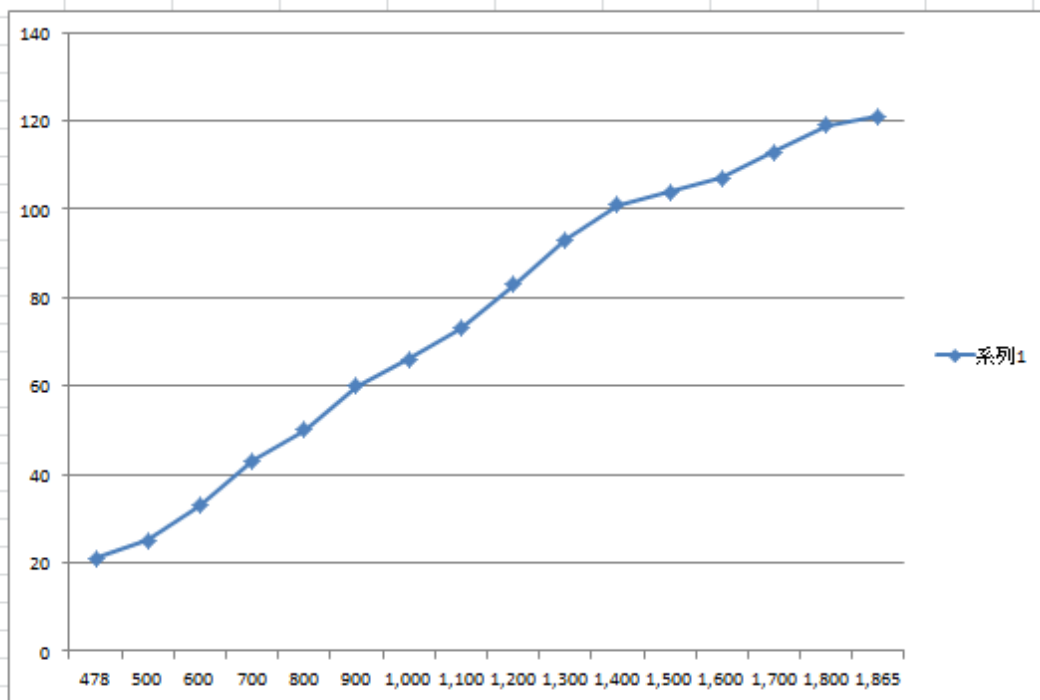
○近似点

天皇名	西暦 x 年	第〇〇代y	
雄略	478	21	歴代天皇第〇〇代(y)
武烈	500	25	
推古	600	33	平均在位年数(a)
文武	700	43	
桓武	800	50	西暦年数(x)
醍醐	900	60	
一条	1,000	66	初代天皇の西暦年b
堀河	1,100	73	
土御門	1,200	83	とすると
後伏見	1,300	93	
後小松	1,400	101	
後柏原	1,500	104	$y = (x - b) / a$
後陽成	1,600	107	
東山	1,700	113	
光格	1,800	119	
孝明	1,865	121	



○近似曲線 2

天皇名	西暦 x 年	第〇〇代 y	
雄略	478	21	歴代天皇第〇〇代(y)
武烈	500	25	
推古	600	33	平均在位年数(a)
文武	700	43	
桓武	800	50	西暦年数(x)
醍醐	900	60	
一条	1,000	66	初代天皇の西暦年b
堀河	1,100	73	
土御門	1,200	83	とすると
後伏見	1,300	93	
後小松	1,400	101	
後柏原	1,500	104	$y = (x - b) / a$
後陽成	1,600	107	
東山	1,700	113	
光格	1,800	119	
孝明	1,865	121	





○近似直線 3

天皇名	西暦 x 年	第○○代y
雄略	478	21
武烈	500	25
推古	600	33
文武	700	43
桓武	800	50
醍醐	900	60
一条	1,000	66
堀河	1,100	73
土御門	1,200	83
後伏見	1,300	93
後小松	1,400	101
後柏原	1,500	104
後陽成	1,600	107
東山	1,700	113
光格	1,800	119
孝明	1,865	121

歴代天皇第○○代→(y)

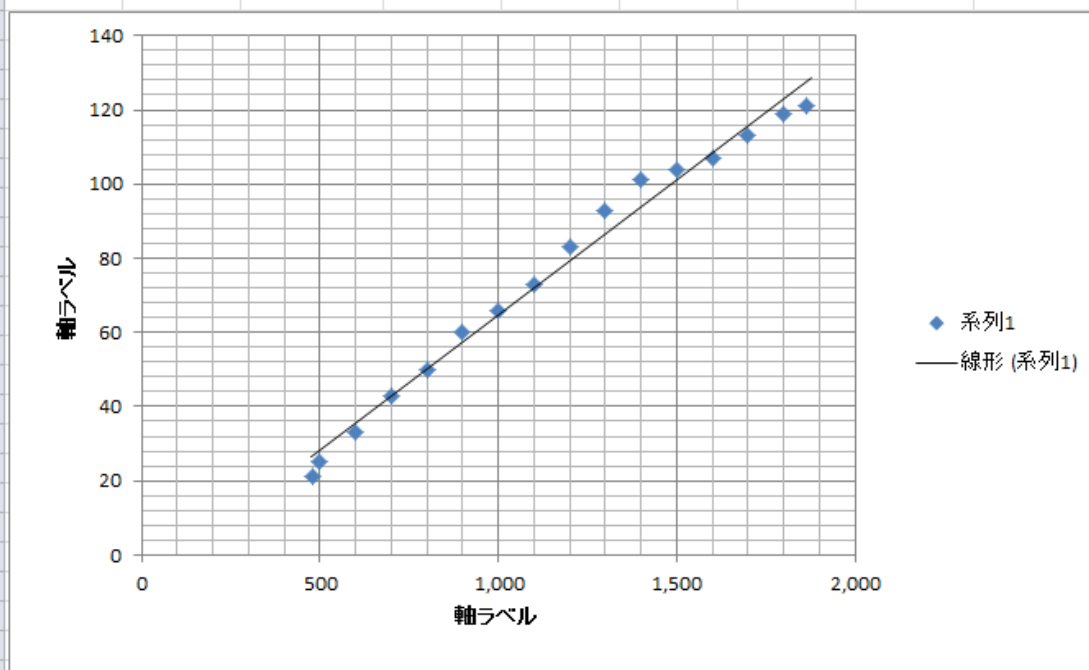
平均在位年数→(a)

西暦年数→(x)

初代天皇の在位した西暦年→b

とすると

$$y = (x - b) / a$$



○歴代天皇の平均在位西暦年

天皇	西暦年	平均在位年数	×第〇〇代	b(初代天皇が在位していた西暦年)
雄略	478年	13.9年	21代	186年
武烈	500年	13.9年	25代	153年
推古	600年	13.9年	33代	141年
文武	700年	13.9年	43代	102年
桓武	800年	13.9年	50代	105年
醍醐	900年	13.9年	60代	66年
一条	1,000年	13.9年	66代	83年
堀河	1,100年	13.9年	73代	85年
土御門	1,200年	13.9年	83代	46年
後伏見	1,300年	13.9年	93代	7年
後小松	1,400年	13.9年	101代	-4年
後柏原	1,500年	13.9年	104代	54年
後陽成	1,600年	13.9年	107代	113年
東山	1,700年	13.9年	113代	129年
光格	1,800年	13.9年	119代	146年
孝明	1,865年	13.9年	121代	183年
				1,596年
サンプリングによる b の平均値は		1,596 /	16 人 =	99.8 年
すなわち b の西暦年は		99.8 年となります。		